

受け止め、聞き、共に居られる神

(創世記二二・九〜二二)

多摩川河川敷で発生した事件の背景が明らかになってきた。被害者家族の母はシングルマザーであり五人の子どもを養うため働きづめだった。他方、主要な加害者の少年の家族は所謂ステップファミリー。また母親は外国人だという。勿論起こした事件は裁かれるべきであろうが、だからといって全てを個人の問題に収斂させ「犯人憎し」の一方的な吊るしあげに終始するようではいけない。寧ろ事件の背後にある種々の困難を行政や地域のコミュニティが如何に支援していくかについて考えるのが大切だと思う。

さて前段において喜びが溢れたアブラハムの家であったが、イサクの成長と共に問題が起こって来た。それは先にアブラハムの側女(そばめ)となつたハガルとその子イシユマエルとサラの反目であった。全員血がつながつていても家族の問題は一筋縄ではいかない。だとすればこの状況が如何に難しいものであるかは想像に難くない。以下、その困難の中に働かれた神について三つのことを見てみたい。

一、人の苦しみを受けとる神

ある日のこと。サラは異母兄のイシユマエルがイサクをからかっているのを見る。しかしこの「からかう」と訳される言葉は同じ創世記の中では愛しあう夫婦が「戯れる」「じゃれあう」という文脈でも用いられているから(参・二六・八)、イシユマエルにイサクをいじめようと意図は余りないようにも見える。彼にしてみればそれは他愛のないいたずらに過ぎなかつた。だがサラはその「笑い」を看過できなかった。彼女が思った。「あの側女の息子ならやりかねない」と。そうして彼女はアブラハムに詰め寄り、ハガルとその息子を追い出すよう迫つた。困つたのはアブラハムである。彼にしてみればイサクもイシユマエルも血を分けた息子である。彼は呻吟した。だがその時神は彼に「苦しまなくてよい」と仰せられたのである。神はアブラハムに「身から出た錆だ」とは言わなかつた。むしろ苦しむアブラハムの苦しみを全部引き受けて下さつたのだ。

二、人の泣き声を聞かれる神

そんなアブラハムに出来たことは最小限の水と食物を用意して彼らを送りだすことだけ。そしてハガルとイシユマエルは死海南西部の荒野を彷徨つた。水も精根も

尽き果てた彼女は息子の最期を見るのがつらくなり、彼を木陰にかくし、声を上げて泣いた。その時である。彼女は懐かしい声を聞いた。神である主の使いの声である。しかもこの神の使いはハガルに言ったのである。「神があそこにいる少年の声を聞かれた(一七節)」と。ハガルは思ったに違いない。「ああ、これはあの時と一緒だ。この子を宿したとき、女主人にいじめられ、荒野で逃げた時も主は私の嘆きを聞いて下さつたではないか」と。この時恐らく彼女は我が子の名の意味を思い起こしただろう。なぜならイシユマエルは「神は聞きいれる」という意味だからである。

三、悩む人と共に居られる神

その時のこと。ハガルの目に希望が見えた。井戸を見つけたのである。彼女はそこに行き、皮袋に水を満たし息子にのませた。そしてこの母子はこの荒野を住処にして生きのびた。だがここは荒野である。男子とはいえ若干十数歳のイシユマエルが母を守つて生きていくことは容易ではない。なぜそれが可能になつたのだろう。聖書はその理由を明瞭に教えている。二〇節には「神が少年と共におられたので、彼は成長し、」とある。アブラハムにとってハガルとイシユマエルはある意味追いきれない重荷であり、常に罪責を刺激される存在

であつた。しかし神はその重荷を完全に担い、ご自身が先に「わたしは彼を大いなる国民としよう(一七・二〇)」と言われた約束をご自身が彼らと共にいることによつて成し遂げられたのである。私たちの神は悩み苦しむものと共にいて助けを与えて下さるお方なのである。

* * *

以上、アブラハムの神は人の苦しみを背負われる方であり、息も絶え絶えの声を聞いて下さるお方であり、そのような弱い者と共に居られる方であることを私たちは見た。そして使徒パウロによれば私たちは新約の教会はキリストにあつてアブラハムの子孫であるから、私たちの信仰する神もまた苦しみを背負い、うめきを聞き、共に居られるお方であることは事実である。実に感謝なことだ。しかしだからといってこの恵みを受けつばなしでよいのだろうか。否である。寧ろこの素晴らしい神の名を処々に告げ知らせ、そのご性質を教会において表さねばならない。そのために必要なのは何よりも「御霊によつて歩みなさい(ガラテヤ五・一六)」という命令に従うことである。日々に聖霊の助けを頂き、神の姿に似せられよう。そしてこの暗く、問題だらけ世の中で悩んでいる人々に神の光といのちを届けようではないか。